【 33 】

氏名	**石 原 陽 一**
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第529号
学位授与の日付	昭和47年12月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	**十二指腸ならびに周辺臓器のレ線的臨床的研究**
論文審査委員	教授 山本道夫　教授 平木　潔　教授 大藤　真

学位論文内容の要旨

十二指腸並びに周辺臓器のレ線診断は，球部の潰瘍や，大きな膵頭部腫瘤などによる十二指腸係蹄の変位などの研究のほかに精細な研究は認められなかった。著者はレ線診断は無痛の肉眼病理学であるという立場から，Jacquemetの方法を改良し，大乳頭癌並びに膨大部癌のレ線的臨床的研究を行ない，両者は10mm前后の腫瘤ではほぼ同様な形態を示すが，腫瘤がある程度大きくなれば，膨大部癌は粘膜下腫瘤としてのレ線的な特徴を示すことを明らかにした。また乳頭部領域癌では十二指粘膜の破壊像が特徴的な所見であった。

次に，閉塞性黄疸例に初めに行なわれるレ線検査は上部消化管レ線検査である点に留意し，一般レ線検査，Hypotonic Duodenogramを中心に，総胆管結石症，胆道癌，胆嚢癌の消化管レ線像について十二指腸球部，十二指腸脚の形態にこれらの病巣のおよぼす影響を検討した結果，胆道の閉塞性病変の診断には，球部，十二指腸脚の間接的なレ線形態変化に留意すべきであるとした。

また，我が国の十二指腸憩室に関する研究はその頻度，臨床的な集計に関して問題点が多い。そこで，著者は教室過去5年間の上部消化管レ線検査対象を中心に臨床的な集計を行ない，同時に本邦人 129例の系統解剖例について，十二指腸憩室の基礎的な研究を行ない，十二指腸憩室が高頻度に認められることを指摘し，その臨床的意義について論じた。

論文審査の結果の要旨

本研究は，従来のJacquementの方法によると大乳頭頭癌と膨大部癌との鑑別が困難であるが，著者の改良した方法では乳頭部領域癌は十二指腸粘膜の破壊像が主たる所見であり膵頭部癌は十二指腸への圧迫所見が主たることを明らかにしており重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は，医学博士の学位を得る資格があると認める。